鍵屋歴史館所蔵『講話』の朝鮮語かな表記について[1]

―子音を中心に―

許　　秀　美

▶キーワード

朝鮮語学書、講話、小田幾五郎、
朝鮮語かな表記

▼要　旨

本論文は、鍵屋歴史館に所蔵される『講話』の朝鮮語かな表記、特にその子音部分について調査考察をおこなったものである。

『講話』は、江戸・明治期に対馬や薩摩で編纂され、朝鮮語通詞たちの語学教科書としてもちいられた朝鮮語学書の一つであるが、現在所在を確認できる『講話』は、①京都大学文学部所蔵本、②沈寿官家所蔵本、③ロシアサンクトペテルブルク東洋写本研究所アストン文庫所蔵本、④鍵屋歴史館所蔵本の４本である。

上記４本のうち編集者および編集時期が明記されている鍵屋歴史館所蔵本は、許芝銀（2012）で紹介された小田幾五郎の末裔にあたる大浦望人司氏が所蔵していた本である。

鍵屋歴史館所蔵本で最も注目すべきところは、小田幾五郎による朱書きなどの書き込みであるが、この書き込みには、本文を修正・加筆した部分、本文の欄外への書き込み、そして朝鮮語本文の発音をあらわすためのかな表記や記号、『全一道人』などの朝鮮語かな書き資料に見られる三点の表記などが見られる。これら朝鮮語の音価をあらわす書き込みは鍵屋歴史館本以外にはほとんど見られない。

本論文は、小田幾五郎による書き込み、特に子音の転写システムについて既存の朝鮮語かな表記資料と比較し検討し、『講話』編纂当時（天明４年（1784）ころ）の朝鮮語の音声・音韻についての情報を提供するものである。

0．序

『講話』は、江戸・明治期に対馬や薩摩で編纂され、朝鮮語通詞たちの語学教科書としてもちいられた朝鮮語学書の一つである。語学書としてもちいられた『講話』については、大曲美太郎（1936）[2]や安田章（1966）[3]などに詳しい。

現在、所在を確認できる『講話』は、京都大学文学部所蔵本[4]（以下、京大本）、沈寿官家所蔵本[5]（以下、沈寿官本）、ロシア東方学研究所サンクトペテルブルグ支所アストン文庫所蔵本[6]（以下、アストン本）、鍵屋歴史館所蔵本[7]（以下、鍵屋歴史館本）の４種類である。

本論文の対象である『講話』は、現在、鍵屋歴史館において保管・管理されている写本であるが、これは、小田幾五郎の末裔にあたる大浦望人司[8]氏が所蔵していた本であり、1998年に九州大学の松原孝俊・佐伯弘次教授によって作成された小田幾五郎[9]関連の資料一覧[10]によって学界に知られることになったものである。長年未公開であったが、本論文の筆者は、2017年末、その影印本[11]を入手した。

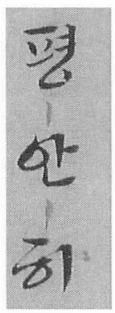
鍵屋歴史館本は、編集者および編集時期が明記されているほかに、小田幾五郎による書き込みがあることが特徴[12]であるが、これら書き込みは他の写本にはほとんど見られない[13]。

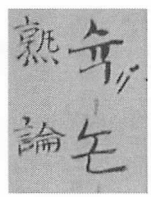
本論文は、鍵屋歴史館本の書き込みのうち、カナをもちいて朝鮮語の発音を示したもの、特に子音の転写システムについて既存の朝鮮語かな表記資料[14]と比較し検討し、『講話』編纂当時（天明４年（1784）ころ）の朝鮮語の音声・音韻についての情報を提供するものである。

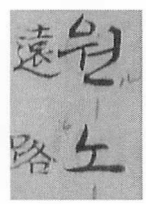
1．鍵屋歴史館本のかな表記

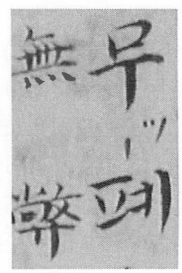
鍵屋歴史館本に見られるかな表記は、［図版１］～［図版４］のように該当朝鮮語に対してカナを付した例と［図版５］のように激音の有気性を示すために日本語の促音「ッ」をもちいた例[15]がある。また、朝鮮語に日本語の濁点をもちいた例[16]も多数見られるが、［図版５］のような促音と朝鮮語に付した濁点については、許秀美（2019）を参照されたい[17]。

［図版１］
（上４a）


［図版２］
（下６b）


［図版３］
（上８a）


［図版４］
（上11b）


［図版５］
（上１a）

鍵屋歴史館本には、朝鮮語に対してかな表記を付したものが、上巻に94箇所、下巻に81箇所

見られる。これら朝鮮語かな表記のうち子音の分布は、［表１］のとおりである。

［表１］

		ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅇ	ㅈ	ㅊ	ㅌ	ㅍ	ㅎ
初声	語頭	11	5	0	0	15	5	8		9	2	0	1	3
	語中	7	26	8	32	2	12	4		14	2	1	0	24
終声		14	37	0	13	8	9	20	11	0	0	0	0	0
合計		32	68	8	45	25	26	32	11	23	4	1	1	27

2．ㄱ

「ㄱ」にカナを付したところは、全部で32箇所あり、語頭の初声に11例、語中の初声に７例、終声に14例見られる。語中の例のうち３例は、語中の例［イ］のような依存形式の例であるため、表記上は語頭であっても、前の語に連続して発音されたとおもわれるので語中の例とみなした。

初声には、カ行とガ行のカナがもちいられているが、語頭の11例はすべてカ行のカナがもちいられている。ガ行のカナがもちいられた例[18]は、語中において鼻音に後続する１例のみである。ガ行のカナがもちいられるのが鼻音の後ろに限られるのは『全一道人』や『朝鮮語訳』などにおいても同様に観察されることであるが[19]、これは、当時の日本語のカ行の濁音が有声性だけではなく鼻音性も有していたためであるとおもわれる[20]。

初声　：

１）語頭

イ．上２b　곳（カン）[21] 누（ナ）려와　唯今下リタト

ロ．上６b　굿ᄒᆞ여（クツタヤ）　サノミ

ハ．上７b　길이 쓴허져（クノチヨ）　道ガ　タヘマシテ

ニ．下14a　빅 곳（コン）나오면　船サヘマイレバ

ホ．下20a　긴（キ）緊 히（ニ）　肝要ノ

２）語中

イ．上２b　가실 곳이（コヂ）　ヲ出ナサル所ガ

ロ．上７b　비 오거（カ）나 아니 오거나　アメガフルノフラヌト申テ

ハ．上11a　샹ᄒᆞ거（カ）나　損ジデモ

ニ．上13a　아줍게（アツソ＊[22]ブカイ）ᄒᆞ시면　ヲトリナサル、ヤウニ

ホ．下13a　만히 남겨（ギヨ）　ヨケイニアマシテ

終声においては、おおむね「ク」がもちいられている。「グ」がもちいられるのは、例［ニ］と例［ヘ］のように「ㄱ」が鼻音化して「ㅇ［ŋ］」になる場合に限られている。

終声　：

イ．上1b　죄족（サ＊イソ＊ク）｛催促｝[23]ᄒᆞ노라　サイソクヲ　致サウトテ
ロ．上4a　족히（サ＊クキ）　サゾ
ハ．上6a　오족（ゾク）민망｛憫忙｝　サゾ　ゴメイワクニ
ニ．上10b　긱（カグ）니｛客裡｝의셔　旅館ニテ
ホ．下10b　션ᄅᆞ력（リヨク）｛宣力｝ᄒᆞ시고　宣力イタサレテ
ヘ．下19a　넉（ノグ）ㆍ히 되올 거시매　廣ロㆍトナリマセウニヨリ

3．ㄴ

「ㄴ」にカナを付したところは、全部で68箇所あり、語頭の初声に5例、語中の初声に26例、終声に37例見られる。

語頭の「ㄴ」は、すべてナ行のカナがもちいられている。『全一道人』や『朝鮮語訳』には、初声の「ㄴ」にダ行のカナがもちいられた例[24]が見られるが、鍵屋歴史館本には見られない。

初声　：

1）語頭

イ．上1a　녑희（ニエブフ＊イ）와셔　脇ニキテ
ロ．上2b　ᄀᆞᆺ（カン）ᄂᆞ（ナ）려와　唯今下リタト
ハ．上10b　ᄂᆞ（ナ）려오려면서　下リマスルト
ニ．下3a　ᄂᆞ（ナ）려（リヨ）지고　ヲチテ
ホ．下19a　넉（ノグ）ㆍ히 되올 거시매　廣ロㆍトナリマセウニヨリ

語中においては、終声「ㄹ」に初声「ㄴ」が続き流音化した場合は、ラ行のカナがもちいられている[25]。

2）語中

イ．上2a　ᄒᆞᆯ니（リ）니　一日デモ
ロ．上7a　올나（ラ）가옵셔　登テ往テ
ハ．上13b　놀납（ラブ）ᄉᆞ와　驚キイリマシタ

また、漢字語の場合、表記においては、「ㄴ」をもちいているが、漢字の本音が「ㄹ」の場合は、ラ行のカナがもちいられている。

ニ．上3b　쥬냥（リヤグ）｛酒量｝의　酒量ニ
ホ．上6b　거논（ロン）｛擧論｝치　トリヲコナイ

漢字の本音が「ㄴ」である場合も、俗音の影響によりラ行のカナがもちいられた例[26]も見られる。

ヘ．下7b　근년（クルレン）ᄒᆞ와ᄂᆞᆫ　　近年ニ至リマシテハ
ト．下16b　운납（ウルラフ＊）｛運納｝ 올　　コギヲサメヲ
チ．下22a　긔노（ロ）｛起怒｝　　怒ヲ　ヲコサレマスル

また、流音が鼻音化する例については、鼻音に後続する「ㄹ［l］」に、ナ行のカナがもちいられている。

リ．上7a　왕ᄂᆡ（ネイ）｛往来｝　　往還
ヌ．下7b　뎜녈（ニエル）｛漸劣｝ ᄒᆞ오와　暇ニ　ヲトロヘマシテ

終声の「ㄴ」は、「ン」がもちいられている

終声　：
イ．上3b　엿흔（ヨットン）　　浅イ
ロ．上6b　거논（ロン）｛擧論｝ 치　トリヲコナイ
ハ．上8b　두 번（バン）　　二度
ニ．下7b　세 번（バン）재　　三度目

その他に、終声「ㄴ」に「ㅎ」が続く場合に、「ㅎ」が脱落し後続の母音と連音化した例や終声「ㄴ」に初声の「ㄹ」が後続した場合に流音化していることをあらわすために「ル」をもちいた例も見られる。

ホ．上7b　믈이 만하（マナ）　　水ガ多クテ
ヘ．上7b　길이 ᄭᆞᆫ허져（クノチョ）셔　　道ガ　タヘマシテ
ト．下20a　긴（キ）｛緊｝ 히（ニ）　　肝要ノ
チ．下16b　젼ᄅᆞ력（リョク）ᄒᆞ셔　　ゴ宜力ニテ
リ．下9b　분ᄅᆞ녕（レグ）｛分領｝ ᄒᆞ여　　分領ヲシテ

4．ㄷ

「ㄷ」にカナを付したところは、全部で8箇所あるが、語頭の初声と終声[27]の例はなく、語中の初声に8例見られる。

語中の「ㄷ」は、母音に後続する例のみであるが、おおむね、ダ行のカナがもちいられている[28]。例［ホ］のようにタ行のカナがもちいられた例は2例見られるが、他の例同様、濁音であるとおもわれる[29]。

初声　：
語中
イ．上2b　기ᄃᆞ（ダ）리ᄋᆞᆸ다가　　待マシテ

ロ．上2b　ᄀᆞᄃᆞᆨ（ドク）나　ヨケイニ
ハ．上6b　/혜/아려（リヤ）보건대”（ダイ）　カゾエテ見マスレバ
ニ．上7b　그날의 다ᄃᆞ（ダ）라　其日ニ至テ
ホ．下13a　션력 ｛宣力｝ ᄒᆞ던（トン）　宣力イタシタ

5．ㄹ

「ㄹ」にカナを付したところは、全部で45箇所あるが、語頭の初声の例はなく、語中の初声に32例、終声に13例見られる。

初声の「ㄹ」は、前の音節の終声が鼻音である例［ホ］の１例を除いてすべてラ行のカナがもちいられている。流音の鼻音化については、「ㄴ」の項目で述べたとおりである。

初声　：
　語中
　イ．上3b　거ᄅᆡ（ライ）｛去来｝ ᄒᆞᆸ더니　ヲ届ケ申マシタニヨリ
　ロ．上7b　어려（リョ）올 듯”　ナリガタイ
　ハ．下4a　싯그러워 ᄒᆞᆸ시려（レ）니와　ゴメンドウニ　ゴサリマセウカナレド
　ニ．下10b　무러（ロ）보시되　タヅネテ見ラレマシタレドモ
　ホ．下11a　흠례（ニエイ）｛欠例｝ 되온　例ノ欠（カゲ）ルコトデ

終声は、おおむね「ル」がもちいられている。終声「ㄹ」に母音が後続し連音化した場合は、ラ行のカナがもちいられている。

終声　：
　イ．上6b　볼（ハ＊ル）셔　トク
　ロ．上11b　ᄆᆞᆺ출（マツツル）　スム
　ハ．下1b　ᄀᆞᆯ（ヲル）　秋
　ニ．下16a　몰（マル）라/ᄅᆞ/도　カワキマシテモ
　ホ．上1a　졀영（セ＊レグ）도” ｛絶影島｝　牧ノ島ノ
　ヘ．下6a　별양（ヘ＊リヤグ）엄칙 ｛別様厳飭｝ ᄒᆞᆸ신 양　別テ厳ウ　ヲ、セツケタレマシタ故
　ト．下20b　홀연（ホレン）｛忽然｝　忽チ（タチマチ）

6．ㅁ

「ㅁ」にカナを付したところは、全部で25箇所あり、語頭の初声に15例、語中の初声に２例、終声に８例見られる。

初声の「ㅁ」は、語頭、語中ともにすべてマ行のカナがもちいられている。『全一道人』や『朝鮮語訳』には、「ㅁ」が語頭に立つ場合の一部にバ行音のカナを当てた例[30]が見られるが、

鍵屋歴史館本には見られない。

初声　：

1）語頭

イ．上7a　ᄆᆞᅀᆞᆷ（マヲム）이　心中ガ

ロ．上8b　힝망｛幸望｝이 밋（ミン）ᄂᆞᆫ가”　望ミガ　トゞキマシタソウニ

ハ．下2a　민력（ミルレク）　民力ノ

2）語中

イ．上12b　글로 말ᄆᆡ（マ）야마　ソレニナゾラヘテ

ロ．下9a　볘개목마（マ）자”　マクラ木マデ

終声「ㅁ」は、すべて「ム」がもちいられている。

終声　：

イ．上3a　한염（ハニエム）｛旱炎｝은　極暑ハ

ロ．下1b　아ᄅᆞᆷ（ロム）답”ᄉᆞ와　目出度存シマスル

ハ．下12b　고념（レム）｛顧念｝ᄒᆞᅀᆞᆸ셔　ヲサバキ下サレマシタニヨリ

ニ．下21a　ᄇᆞᄅᆞᆷ（ラム）은　風ハ

7．ㅂ

「ㅂ」にカナを付したところは、全部で26箇所あり、語頭の初声に5例、語中の初声に12例、終声に9例見られる。

初声の語頭の「ㅂ」は、すべてハ＊行のカナがもちいられ[31]、語中の「ㅂ」は、おおむね、バ行のカナがもちいられている。語中においてバ行のカナがもちいられているのは、「ㅂ」が母音や鼻音に後続する場合であり、二点と三点の使い分けは、有声音と無声音の区別にしたがっているようにおもえる。ただし、「이번（バン）」、「이번（ハ＊ン）」の両方の表記が混在しているなど表記に揺れが見られる。このような表記の揺れは、『全一道人』や『朝鮮語訳』においても確認できる[32]。

初声　：

1）語頭

イ．上6b　볼（ハ＊ル）셔　トク

ロ．上7b　비가 벗적（ホ＊ツソ＊ク）오면　雨ガセツヽフリマスレバ

ハ．上12b　본릐（ホ＊ルライ）｛本来｝　本ト

ニ．下13a　선력｛宣力｝ᄒᆞ던 ᄇᆞ（ハ＊）라미　宣力イタシタセンガ

2）語中

イ.	上1b	도박（バク）{到泊}	ゴ渡着
ロ.	上8b	두번（バン）	二度
ハ.	上12a	금번（バン）	此度
ニ.	下1b	못（モン）밋출 번（ボン）	筈ニ合ヒマスマイト
ホ.	上11b	이번（バン）온	此度ハ
ヘ.	下14b	이번（ハ＊ン）의	此度ノ

終声「ㅂ」は、おおむね「ブ」がもちいられているが、「フ＊」がもちいられた例も１例見られる[33]。「ㅂ」が激音化する環境や連音化する環境においては、バ行のカナがもちいられている。『全一道人』や『朝鮮語訳』では、「ㅂ」の後に「ㅎ」が接し激音化する環境においては、それぞれの要素を別々に明記した「ツ＋ハ行音」や「ブ＋ハ行音」の表記がもちいられているが、鍵屋歴史館本には、要素を別々に明記した表記は見られない。また、鍵屋歴史館本には、例［ニ］や例［ホ］のように連音化を反映した表記が見られるが、『朝鮮語訳』には見られない[34]。

終声　：

イ.	上13b	놀납（ラブ）ᄉᆞ와	驚キイリマシタニ
ロ.	上1a	녑희（ニエブフ＊イ）	脇ニ
ハ.	下10a	밋좁（サ＊ブ）쟈 ᄒᆞ고	ヲ頼ミ申サウト
ニ.	上13b	잡어던（サ＊バツトン）거” 시매	トリヲキマシタギユエ
ホ.	下9a	집어（チボ）	ヒラウテ
ヘ.	上13a	아좁게（アツソ＊ブカイ）ᄒᆞ시면	ヲトリナサル丶ヤウニ
ト.	下16b	운납（ウルラフ＊）{運納} 을	コギヲサメヲ

8. ㅅ

「ㅅ」にカナを付したところは、全部で32箇所あり、語頭の初声に８例、語中の初声に４例、終声に20例見られる。

初声「ㅅ」は、語頭、語中ともにサ行のカナがもちいられている。

初声　：

1）語頭

イ.	上4a	셩열（セゲルイ）{盛熱} 의	炎暑ニ
ロ.	上7a	ᄉᆞ（サツ）도 {使道} 씌	府使ニ
ハ.	下3a	비가 ᄉᆡ여（サヤ）	アメガモツテ

2）語中

イ.	上1a	업ᄉᆞ（サ）외	ゴサリマセヌ
ロ.	上7a	여ᄉᆡ（ヨソイ）길이오니	六日路デゴサルニヨリ

ハ．下18a　섭섭ᄒᆞᆫ 일이 업ᄉᆡ（ソイ）라 ᄒᆞ고　ノコリ　ヲヽイコトハナイト申テ

終声「ㅅ」は、「ㄷ［t］」に中和され、おおむね「ツ」がもちいられている。

終声　：

イ．上2b　못（モツ）자시다　ヲアガリナサレヌト
ロ．上5a　드렷（レツ）ᄉᆞᆸᄃᆞ니　差上マシタニ
ハ．下9a　언젓（ゾツ）다가　アゲテ

「ㄷ［t］」が鼻音化する場合は「ン」がもちいられているが、母音間においても「ㄷ［t］」に対して「ン」をもちいた例も見られる。「ㄷ［t］」が鼻音化する例は、『韓語訓蒙』にも見られる表記[35]であるが、これは慶尚道の方言形であるとおもわれる[36]。

ニ．上1b　못（モン）밋출 번　筈ニ合ヒマスマイト
ホ．上2b　ᄀᆞᆫ（カン）ᄂᆞ（ナ）려와　唯今下リタト
ヘ．上8b　힝망 ｛幸望｝ 이 밋（ミン）ᄂᆞᆫ가”　望ミガ　トヾキマシタソウニ
ト．上2a　못（モン）오실가　ヲ出ナサレマイカト
チ．上6a　못（モン）오시기의　ヲ出ナサレヌニツキ

9．ㅇ

「ㅇ」については、初声の位置では子音の音価を持たないため、終声の例についてのみ述べることとする。終声「ㅇ」にカナを付したところは、全部で11箇所見られる。

終声「ㅇ」は、おおむね「グ」がもちいられている。

終声　：

イ．上1a　졀영（セ＊レグ）도” ｛絶影島｝　牧ノ島
ロ．上3b　쥬냥（リヤグ）｛酒量｝ 의　酒量ニ
ハ．下6a　별양（ヘ＊リヤグ）엄칙 ｛別様厳飭｝ ᄒᆞᆸ신　永別テ厳ウヲヽセツケラレマシタ

終声の「ㅇ」が脱落した形であらわれる例も見られる。「ㅇ」が脱落した例のうち、上昇二重母音の前において「ㅇ」が脱落する現象は、『全一道人』の凡例においても述べられている[37]。鍵歴史館本においては、その現象が顕著にあらわれている。

ニ．上3a　죵용（チヨヨギ）｛従容｝ 히　ユルリト
ホ．上4a　셩열（セゲルイ）｛盛熱｝ 의　炎暑ニ
ヘ．下15a　궁인（クイン）｛弓人｝ 들” 이　角見ドモガ

ト．下19a　영、（エエグ）{永々}　ᄒᆞ올 거시요　　永々イタスギテゴサリマシ

終声「ㅇ」に母音「ㅣ［i］」が後続し、連音化した場合は、「ギ」がもちいられている。

ニ．上3a　죵용（チヨヨギ）{従容}　히[38]　　ユルリト
チ．上7a　밤듕이（ギ）라도　　夜中タリトモ

10. ㅈ

「ㅈ」にカナを付したところは、全部で23箇所あり、終声の例はなく、語頭の初声に9例、語中の初声に14例見られる。「ㅈ」には、おおむね、ザ行、サ＊行のカナがもちいられている。二点と三点の使い分け[39]は、『全一道人』や『朝鮮語訳』とほぼ同じ様相を見せている。しかし、「져」について[40]『全一道人』や『朝鮮語訳』においては、「テ＊」をもちいた例が多数見られるが[41]、鍵屋歴史館本には、「テ＊」をもちいた例は見られない。

初声　：

1）語頭

イ．上13b　잡어던（サ＊バットン）　　トリヲキマシタ
ロ．上1a　졀영（セ＊レグ）도”{絶影島}　　牧ノ島
ハ．上5b　젼례（セ＊ルレイ）{前例}　오매　　センレイ故
ニ．上3a　죵용（チヨヨギ）{従容}　히　　ユルリト
ホ．上4a　족히（サ＊クキ）　　サゾ
ヘ．上1b　죄족（サ＊イソ＊ク）{催促}　ᄒᆞ노라　　サイソクヲ致サウトテ
ト．下17b　죄족（ザイソ＊ク）{催促}　ᄒᆞ오쇼셔　　ゴサイソク　ナサレマセイ

2）語中

イ．上3a　ᄒᆞᆫ적（ゾク）　　ユルリト
ロ．上10b　그저（ザ）　　ヤハリ
ハ．上7b　씐허져（クノチョ）　　タヘマシテ
ニ．上5b　앗줍（サ＊ブ）게 ᄒᆞ라 ᄒᆞ옵시니　　トレト　ヲヽセラレマスルニヨリ
ホ．上14b　급족（サ＊ク）스러이　　急々
ヘ．下7a　엿ᄌᆞ（サ＊）올　　申ノベマスル
ト．上6a　오족（ゾク）민망　{憫忙}　　サゾ　ゴメイワクニ

11. ㅊ

「ㅊ」にカナを付したところは、全部で4箇所あり、終声の例はなく、語頭の初声に2例、語中の初声に2例見られる。語頭の「ㅊ」は、すべてサ＊行のカナがもちいられている。前項の「ㅈ」と同様、「テ＊」をもちいた例は見られない。

初声　：

1）語頭

イ．上6b　쳔연（セ＊ニエン）{遷延}　ᄒᆞ옵다가　延引イタシマシテ

ロ．上9a　촐히（サ＊リ）실 것도　トリソロヘラレマスルシナモ

2）語中

イ．上11b　ᄆᆞᆺ출（マツツル）　スム

ロ．下12b　맛촘（ソ＊ム）내　折節

12. ㄷ

「ㄷ」にカナを付したところは、語中の初声に1例見られるが、タ行のカナがもちいられている。

初声　：

語中

イ．下3b　엿ᄐᆡ（ヨツタイ）ᄭᆡ지　今マデ

13. ㅍ

「ㅍ」にカナを付したところは、初声の語頭に1例見られるが、「ハ＊」のカナがもちいられている。

初声　：

語頭

イ．上4b　필연（ヒ＊レン）{必然}　ヒツゼン

14. ㅎ

「ㅎ」にカナを付したところは、全部で27箇所あり、語頭の初声に3例、語中の初声に24例見られる。

語頭の「ㅎ」は、すべてハ行のカナがもちいられている。

初声　：

1）語頭

イ．上3a　한염（ハニエム）{旱炎}　은　極暑ハ

ロ．下20b　홀연（ホレン）{忽然}　忽チ（タチマチ）

語中の「ㅎ」は、すべての例において脱落した形であらわれる[42]。『全一道人』や『朝鮮語訳』

においては、語中の「ㅎ」にハ行のカナがもちいられており、「ㅎ」が脱落した例は数少ない[43]。鍵屋歴史館本は、語中の「ㅎ」にハ行のカナをもちいた例は見られない。

2）語中

イ.	上5a	무폐 ⦃無弊⦄ 히（イ）	ヲサヽハリナウ
ロ.	上8b	소홀 ⦃疎忽⦄ 히（リ）	ソコツニ
ハ.	上9a	편안 ⦃平安⦄ 히（ニ）	ゴヘイアンニ
ニ.	上9a	촐히（サ＊リ）실 것도	トリソロヘラレマスルシナモ
ホ.	上2b	반가히（イ）	悦シウ
ヘ.	下6b	폐단” ⦃弊端⦄ 히（ニ）업게	ヘイタンノナイヤウニ

15. 結

本論文では、鍵屋歴史館に所蔵される『講話』に見られる朝鮮語かな表記、特にその子音部分について考察をおこなった。全体的には、既存の朝鮮語かな資料である『全一道人』や『朝鮮語訳』と同様の傾向を見せているが、鍵屋歴史館本の特徴をまとめると以下のようである。

(1) ガ行とダ行について、ダ行の鼻音性は、ほぼ喪失した体を示している。既存の資料では鼻音性を保っていたガ行についても鼻音性が喪失していく過程を見せている。
(2) 朝鮮語の鼻音「ㄴ」と「ㅁ」に異音として「出わたり」off glideの破裂音［ⁿd］、［ᵐb］をともなったダ行やバ行音のカナを当てた例が見られない。
(3) 流音化や連音化など、発音変化を反映した表記が顕著に見られる。
(4) 語中の「ㅎ」は、すべて脱落した形であらわれる。

以上を要するに、これら本資料のかな表記は、鍵屋歴史館本編纂当時（天明4年（1784）ころ）の朝鮮語音声・音韻の特徴を示すものであり、既存の資料とは異なる表記の特徴が発見されたため、音韻史への貢献が期待される。

【註】

（1）本稿は、平成29～31年度学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）・課題番号:17K02756）による研究成果の一部である。

（2）大曲美太郎（1936）は、明治初年釜山に設置された草梁館語学所で使用されていた『講話』を紹介し、「日鮮官吏が交換する種々の挨拶の練習用として編輯せしもの紙数21枚」と述べている。大曲美太郎が見た『講話』の原本がいま何処にあるかは不明である。

（3）安田章（1966）は、その当時東京大学小倉文庫に所蔵されていた中村庄次郎寄贈本の『講話』を紹介している。しかし、この本は現在所在不明で、福井玲編（2002）で作成された小倉文庫目録には含まれていない。福井玲（2011）によれば、小倉進平の寄贈書目録にあって、現在の小倉文庫に存在しない本が何冊かあるが、『講話』もこれに含まれる。

（4）京都大学文学部所蔵本［Philology/2 D/40.b］、上下2巻2冊。各冊とも「講話」と書かれた題箋が付されている。扉はなく、上下巻それぞれの首題に「講話　上」、「講話　下」とある。

本文は上巻20丁（半葉５行）、下巻25丁（半葉６行）、上巻末に「主　朴伊円　道存」との朱筆の書付がある。朴真完（2012）によれば、朴伊円の号は、道存。出生不明、弘化３年（1846）没。丁酉再乱（1598）当時、薩摩藩に連れてこられた陶工朴平意の子孫であり、薩摩藩の朝鮮語通詞として活躍した。苗代川で筆写された朝鮮語学書『類合』、『和語類解』を筆写した人物である。

本文は、漢字混じりの朝鮮語で書かれており、漢字の部分の右側に朝鮮語読みが付されているが、傍線を用いて朝鮮語読みを省略しているところも多数見受けられる。本文の左側には対訳日本語が付されている。朝鮮語本文には、筆写者による訂正箇所も数箇所見られる。

（５）沈寿官家所蔵本、上下２巻、上巻にのみ「講話」と書かれた題箋が付されている。扉はなく、上巻には、「講話　上終」と尾題が、下巻には、「講話　下」と首題がある。上巻16丁（半葉６行）、下巻22丁（半葉６行）、上巻最終頁に虫損はあるものの「朴林達」の名が認められる。「朴林達」は、文化９年（1812）生、文政２年（1819）朝鮮語稽古通事、天保３年（1832）朝鮮通事、嘉永２年（1849）朝鮮稽古通詞、文久３年（1863）與頭役。沈寿官家所蔵『交隣須知』を筆写した人物である。徳永和喜（2005）によれば、朝鮮通詞をつとめ辞職するまでの間、すなわち1832年から1863年の間に筆写されたものと考えられる。

本文は、漢字混じりの朝鮮語で書かれており、漢字の部分の右側に朝鮮語読みが付されているが、京大本同様、傍線を用いて朝鮮語読みを省略しているところも多数見受けられる。本文の左側には対訳日本語が付されている。本文全般に虫損甚だしく、判読が困難な頁が多い。

（６）ロシア東方学研究所サンクトペテルブルグ支所（現、東洋写本研究所）アストン文庫所蔵本［No.C６］、Dialogues In Koreanとの題が付された革洋装本１冊。原本の和本をばらし、各丁ごとに洋紙各１枚をはさみ、洋装しなおしたもの。和本原本の部分は、上巻14丁（半葉７行）、下巻22丁（半葉７行）、上下巻とも、首題に「講話」とある。

本文は、漢字混じりの朝鮮語で書かれ、漢字の部分の右側に朝鮮語読みが付されている。京大本や沈寿官本のように傍線を用いて朝鮮語読みを省略しているところは見られない。本文の左側には日本語訳が付されている。朝鮮語本文には、筆写者による訂正箇所や、「×、♯、※」など近代的な記号をもちいた印も多数見受けられる。

（７）鍵屋歴史館所蔵本、上下２巻１冊。表紙に「講話　上下　全」と書かれた題箋が付されている。扉に「講話　乾坤　全」とあり、上下巻それぞれの首題に「講話　上」、「講話　下」とある。

本文は上巻14丁（半葉７行）、下巻24丁（半葉７行）。上巻の最終頁には「天明四年辰五月編集　小田」とあり、下巻の最終頁には、「天明四年辰五月編集　小田幾五郎」とある。上下最終頁の書付の後には、小田幾五郎の号である「二姜」をもちいた「二姜之書」の落款がある。

本文は、すべて朝鮮語で書かれているが、京大本、沈寿官本、アストン本において漢字表記されている部分には朝鮮語の左側に漢字を付し、日本語対訳は、朝鮮語の右側に付してある。本文には、小田幾五郎によるものとおもわれる朱書きを含むさまざまな書き込みが見られる。この書き込みには、本文の修正・加筆とともに、朝鮮語の音価をあらわすためのカナ表記や記号なども見られる。

（８）九州の中の朝鮮文化を考える会（2002）　pp.121-126.

（９）宝暦四年（1754）生、天保二年（1831）没。通詞としての最高職である、「大通詞」の位につくなど、生涯朝鮮語通詞として活躍した。また、『草梁話集』や『象胥紀聞』など数々の朝鮮研究書の著述をなした。田川孝三（1978）に詳しい。

（10）九州の中の朝鮮文化を考える会（2002）p.124. この一覧は、許芝銀（2012）で確認できる。

（11）鍵屋歴史館所蔵『講話』の影印本は、現在大阪大学外国学図書館（請求番号：319.1/671）と龍谷大学深草図書館（請求記号：829.1/オイコ）にて閲覧が可能である。

（12）許秀美（2018）、（2019）参照。

（13）沈寿官本には、鍵屋歴史館本同様、ハングルや漢字に日本語の濁点を付しているところが見られる。特に母音に濁点を付した例［上９b：中宴 {등연ᄀᆞ} や、「ㄴ」に濁点を付した例［上12a：遠路 {원노ᄀᆞ}］は、鍵屋歴史館本には見られない書き込みであり、沈寿官本の書き込みについての考察も必要であるが、沈寿官本は、虫損甚だしく、本文の判断が困難である。沈寿官本の書き込みについての考察は今後の課題である。

(14) 対照資料としては、『全一道人』と『朝鮮語訳』をもちいる。

『全一道人』：享保14年（1729）雨森芳洲著。1冊。写本。本書は、中国明代の汪廷訥の著した教訓書『勧懲故事』を朝鮮語に訳し、対訳日本語を付したもの。朝鮮語に当たる部分が片仮名、日本語の部分が漢字平仮名交じりによって表記されており、かな書き朝鮮語の代表的な資料である。安田章（1964）参照。

『朝鮮語訳』：江戸の儒学者服部南郭が寛延三年（1750）に筆写したもので、全3冊。第1冊は、カタカナ漢字交じりの朝鮮語を発音通りに書き、その左横に一段下げひらがな漢字交じりの日本語対訳を付す。「全一道人」と同様、18世紀初中葉の朝鮮語音韻資料として重要な資料の一つである。岸田文隆（2006）参照。

(15) 促音の「ッ」は、「ㅋ」の前に1例、「ㅌ」の前に11例、「ㅍ」の前に9例、「ㅊ」前に12例、上下巻合わせて33例見られる。許秀美（2019）参照。

(16) 濁点を付した子音は、「ㄱ」、「ㄷ」、「ㅂ」、「ㅅ」であり、上下巻合わせて414箇所見られる。許秀美（2019）参照。

(17) 朝鮮語に付した濁点については、許秀美（2019）で論じたので基本的にここでは触れない。

(18) 朝鮮語の初声「ㄱ」に付された「カ行」と「ガ行」かなの使い分けについては、安田章（1964）pp.24-25に詳しい。鍵屋歴史館本には、初声の「ㄱ」を「ガ行」で受け止めたことを示すために朝鮮語に濁点を付している例が84例見られるが、83例は「ㄱ」に先行する音節の終声が鼻音「ㄴ, ㅁ, ㅇ」の場合であり、1例は、母音間の「ㄱ」に付された例である。母音間の「ㄱ」にガ行音がもちいられた例は『全一道人』や『朝鮮語訳』などでは見られない。

(19)『全一道人』や『朝鮮語訳』などでは、母音間の「ㄱ」が濁音表記された例は見られず、先行する音節の終声が鼻音「ㄴ, ㅁ, ㅇ」の場合に限られる。安田章（1964）pp.24-25、陳南澤（2003）p.89、金文姫（2018）pp.117-121参照。

(20) ロドリゲス、ジョアン原著・土井忠生注（1955） p.637参照。

(21) 朝鮮語に付されたカナについては、（ ）をもちいて示す。ただし、朝鮮語の終声音だけにカナを付したものや朝鮮語に付された濁点については、（ ）をもちいない。また、本文にもちいられた畳字については、「ㆍ」を、本資料編纂者が加筆したものについては、//をもちいて示す。下線は本論文の筆者が付したものである。

(22) カナに付された三点は、「＊」をもちいて示す。

(23) ｜ ｜ 内の漢字は、朝鮮語本文の左に付された漢字を示す。

(24) 語頭初声「ㄴ」に「ダ行」のカナがもちいられた例は、朝鮮語の鼻音「ㄴ」が異音として「出わたり」off glideの破裂音［ⁿd］を伴う場合があることと関連しているとおもわれる。安田章（1964）pp.25-26、岸田文隆（2008）pp.75-76参照。

(25)『朝鮮語訳』には、終声「ㄹ」に初声の「ㄴ」が続いても流音化していない状態とおもわれる「ル＋ナ行音」を当てた例が見られる。岸田文隆（2008）p.77参照。

(26)「년 ｜年｜」と「납 ｜納｜」の音節頭の「ㄴ」が俗音の影響を受けたとおもわれるが、『全一道人』の凡例に［運米官 ｜운미관｜ ウルミグワン］の例が見られることから、「근 ｜近｜」「운 ｜運｜」の「ㄴ」が舌側音化した可能性も考えられる。宋敏（1986）pp.44-45参照。

(27)「ㄷ」を終声にもちいた例はないが、「ㄷ［t］」に中和される終声「ㅅ」については、「ㅅ」の項目で述べる。

(28) 鍵屋歴史館本には、「ㄷ」を「ダ行」で受け止めたことを示すために朝鮮語に濁点を付している例が162例見られる。うち78例は鼻音に後続する環境以外のものである。許秀美（2019）参照。

(29)『全一道人』においては「ㄱ」同様、語中の「ㄷ」についても、例外なく鼻音に接しない限りすべてタ行音が当てられている。『全一道人』には、「カッチャットニ」や「ヲブチロットニ」などの例について安田章（1964）では、これらを有声音として捉えなければならないとしている。安田章（1964）pp.27-28参照

『朝鮮語訳』では、前に有声音が立つ場合にもダ行音のカナをもちいた例が見られ、ダ行音の鼻音性が徐々に喪失していく過程を示している。鍵屋歴史館本においては、朝鮮語に濁点を付した例も含めるとダ行音の鼻音性はほぼ喪失したと考えられる。

(30) 語頭初声「ㅁ」に「バ行」のカナがもちいられた例は、朝鮮語の鼻音「ㅁ」が異音として「出わたり」off glideの破裂音〔ᵐb〕を伴う場合があることと関連しているとおもわれる。安田章（1964）p.48、岸田文隆（2008）pp.83-84参照。

(31)『全一道人』や『朝鮮語訳』には、語頭の「ㅂ」に「バ行」のカナをもちいた例が見られるが、鍵屋歴史館本においては、語頭の「ㅂ」に「バ行」のカナをもちいた例は見られない。安田章（1964）p.48、岸田文隆（2008）p.83参照。

(32) 安田章（1964）pp.28-29、岸田文隆（2008）p.85参照。

(33) 岸田文隆（2008）p.86、許仁寧（2014）pp.107-108参照。

(34) 岸田文隆（2008）p.86参照。

(35)『韓語訓蒙』には、「못ᄒᆞᆫ다」に対して「モンタンダ」と表記している例が見られる。岸田文隆（2000）p.150参照。

(36) 韓国精神文化研究院（1987-1995）Ⅶ p.300、Ⅷ p.275参照。

(37) 宋敏（1986）pp.46-47参照。

(38) 鍵屋歴史館本では、語中の「ㅎ」はすべて脱落した形であらわれる。

(39) 奈良林愛（2010）pp.118-119参照。

(40)「져」について、『全一道人』では、「セ＊」を当てた例は見られない。『朝鮮語訳』では、「定 ㅣセ＊クㅣ チ」の１例のみが見られるが、鍵屋歴史館本では、『朝鮮語訳』で見られる「定〔졍＜뎡〕」に対して朝鮮語に濁点を付し「졍゛」と表記している。この他にも、鍵屋歴史館本には「져」に濁点を付した例が多数見られるが、「져」に対して「セ＊」をもちいた例及び、「져」に濁点を付し例の音価については、さらに検討を要する。安田章（1964）pp.30-34、岸田文隆（2008）pp.90-92、許仁寧（2014）pp.59-61参照。

(41)「져」に対して「テ＊」がもちいられたのは、「ㅈ」の口蓋音化の完了以前の様相を示しているためとおもわれる。奈良林愛（2010）pp.118-119、岸田文隆（2008）pp.91-92参照。

(42)「ㅎ」が脱落する現象は、15世紀から見られ「ㅎ」脱落型と維持型が当初共存していたが、体言の場合は17世紀以降、用言の場合は19世紀以降に「ㅎ」脱落型が優勢になる。許仁寧（2014）pp.109-110。

(43) 岸田文隆（2008）pp.95参照。

【参考文献】

大曲美太郎（1936）「釜山港日本居留地に於ける朝鮮語教育」、『青丘学叢』第二十四号、pp.146-163、日本：青丘学会

韓国精神文化研究院（1987-1995）『韓国方言資料集』Ⅰ-Ⅸ、韓国：韓国精神文化院

岸田文隆（2000）「アストン旧蔵江戸期・明治初期朝鮮語学書写本類調査報告」、『青丘学術論集』17、pp.141-167、日本：韓国文化研究振興財団

岸田文隆（2006）「早稲田大学服部文庫所蔵の「朝鮮語訳」について──「隣語大方」との比較──」、『朝鮮学報』第199･200輯、pp.1-35、日本：朝鮮学会

岸田文隆（2008）「早稲田大学服部文庫所蔵『朝鮮語訳』の朝鮮語かな表記について（その１：子音について）」、Dynamics in Eurasian Languages、pp.71-102、日本：神戸市看護大学

九州の中の朝鮮文化を考える会（2002） 歩いて知る朝鮮と日本の歴史 九州の中の朝鮮』、日本：明石書店

許秀美（2016）「朝鮮語学書と歴史資料──『講話』を中心に」、『日本語言語文化研究』第四輯（上）、pp.144-157、中国：延辺大学出版社

許秀美（2018）「鍵屋歴史館所蔵『講話』について」、『龍谷紀要』第40巻第１号、pp.27-39、日本：龍谷大学

許秀美（2019）「朝鮮語学書の音注について──鍵屋歴史館所蔵『講話』を中心に──、『第11回國際譯学書學會國際學術會議 동아시아의 譯学政策』発表予稿集、pp.123-134、韓国：国際訳学書学会

金文姫（2018）「近世期日朝対訳資料の研究──「隣語大方」を中心に──」、大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士論文、日本：大阪大学

宋敏（1986）『前期近代国語音韻論研究』、国語学叢書８、韓国：탑출판사

田川孝三（1978）「対馬通詞小田幾五郎とその著書」、『書物同好会会報』、pp.517-528、日本：龍渓書舎
陳南澤（2003）「朝鮮資料」による日本語と韓国語の音韻史研究」、東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻　言語学専門分野博士論文、日本：東京大学
徳永和喜（2005）『薩摩藩対外交渉史の研究』、日本：九州大学出版
奈良林愛（2010）「近世朝鮮語学習書の発音注意記号「三点」について」、『朝鮮語研究』４、pp.117-137、日本：朝鮮語研究会
朴真完（2012）「나에시로가와（苗代川）조선어 학습서의 계통 재고」、『한국어학』54、pp.174-178、韓国：한국어학회
朴真完（2013）『「朝鮮資料」による中・近世語の再現』、日本：臨川書店
福井玲（2002）「小倉文庫目録」『朝鮮文化研究』第９号、pp.172-182、日本：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部朝鮮文化研究室
福井玲（2011）「小倉文庫의 특징에 대하여 ― 중세어 자료와 대마도 관련 자료를 중심으로 ―」、『奎章閣』39、pp.241-376、韓国：서울大学校奎章閣韓国学研究院
許仁寧（2014）「「全一道人」의 한국어 복원과 음운론적 연구」、고려대학교대학원 석사논문、韓国：고려대학교
許芝銀（2012）『왜관의 조선어통사와 정보유통』、韓国：景仁文化社
安田章（1964）『全一道人の研究』、京都大学国文学会、日本：京都大学
安田章（1966）「苗代川の朝鮮語写本類について ― 朝鮮資料との関連を中心に ―」、『朝鮮学報』39/40、pp.210-237、日本：朝鮮学会
安田章（1980）『朝鮮資料と中世國語』、笠間叢書147、日本：笠間書院
ロドリゲス、ジョアン原著・土井忠生訳注（1955）『日本大文典』、日本：三省堂